だんしはしんだわかってた①

西をさむ

戒名は真砂女でよろし紫木蓮　　鈴木真砂女

立川談志（本名：松岡克由）、又の名を、立川雲黒斎家元勝手居士、まあこんな胡散臭い戒名は、宗派を問わず何処の寺も相手にするとは思えませんが、一人の落語家がこの世とおさらばした事は確かです。

真砂女さんを枕に使うなんて、不躾なと思われるかも知れませんが、私にはそうとも言えない所が彼女の句には有るのではないかと思えてならないのです。例えば、蛍を詠んだ句にしても、その周りには必ず人間の匂が漂って居るからです。どの様な句でもいいですから、一つ引っ張り出して深く鑑賞して見てください。

さて本題に戻して、克由少年は落語が好きでよく寄席通いをして居たそうです。そこで彼は、古典落語をしこたま聞きました。そうして柳家小さんに入門です。正しく言えば、彼は高校中退で大学へも行っていないので、入学だったかもしれません。昔から、読み、書き、算盤と言って、これだけ会得すれば、世の中それなりに渡って行ける時代だったのかも知れませんが、今で言うフリーターで派遣社員に成ったのでした。入門を敢えて入学と言いましたが、「学」の字は、学ぶに成ります。学ぶを辞書で引くと、まねてする、教えを受ける、学問をする等と有りますが、これでは堂々めぐりする計りです。猿ではありませんから、真似てばかりでは此処から抜け出せません。これが私達に向けられた課題かもしれません。

さて、落語のネタに戻って、平林を如何に読むか（たいらばやしか、ひらりんか、いちはちじゅうのもっくもく、ひとつとやっつでとっきっき）。この話の主人公は、全てを正しいと思い込み、素晴しく柔軟な発想の持ち

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

主です。皆さんはそうは行きません。それは既成概念に囚われて居るからです。これと良く似たことを私は子供の頃に経験しました。一枚の新聞紙を拡げ、ある言葉を探す遊びです。勿論、本文、広告文など何でもかまいません。四、五人の中から一人がある言葉を言って、残りの者がそれが何処に有るかを見付けるのです。ある時、一人の子供が「がふえがつく」と言いました。残りの者は必死でその言葉を探しました。でも如何しても見付かりません。そこで皆は、到頭降参してその子に聞きました。その子が指差したのは広告欄で、「血がふえ肉がつく」と書かれていました。でも笑ってはいけません。血と肉は赤く印刷されて居たのです。ただ漢字が読めなかっただけかも知れませんが、まさしくこの発想は、彼にしか出来なかったのです。

話が少し横に逸れましたが、立川談志は古典落語を勉強して行く内に、落語は先細りすると気付いた様です。安楽庵策伝から烏亭焉馬、三笑亭可楽、そして現在へと受け継がれて居る落語が、名人だね、粋だねとだけで生き延びているのは、落語の本質を理解できなくて、滅びの道へと紛れ込んだと思ったのです。

ここで談志風に、「何？面白くねえ、面白くなきゃあ読むなよ、こんちくしょう、てめえらの俳句よりはましだろ、次回はもっと面白くねえぞ」。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。